

「あらすじ」

橋の上でアニメの主人公のコスプレをしてバンジージャンプを飛ばうとしている主婦、
波多野^{はたの} 真実^{まみ}。それを見守る家族。彼女は
なぜ、こんな格好でバンジージャンプをする
ことになったのか。

さかのぼること3か月前。都内のはとバス
旅行にでかけた波多野一家。高所恐怖症の真
実は東京タワーもスカイツリーも展望台まで
昇ったことがない。その原因ははつきりと覚
えてはいないが幼いときに団地の五階から転
落したため潜在意識に植え付けられた恐怖の
せいじゃないかと母親から聞いて思っている。

真実の息子、晴人^{はると}は高校二年生。アニメ
オタクでフィギアを集めるのが趣味。普段は
おとなしい性格だが、テスト勉強になると豹
変し、勉強ができない自分を責めて部屋の壁
に穴を空ける等して暴れる。それを気に病み、
ママ友やスクールカウンセラーに相談する真
実。そこで、原因は幼少期の心の傷だと言わ

れ、晴人が小学生のとき、テスト勉強で自分が晴人を怒鳴りつけていたことを思い出す。忘れていた自分を責めて泣く真実。晴人にそのことを謝りたいがなかなか言い出せない。夫の浩二に相談すると、環境が変われば言いやすくなるのではとキャンプに行こうと提案される。普通に謝ったんじゃ許してもらえないと思った真実はたまたまテレビでバンジージャンプを見て、一大決心をする。キャンプ場のそばの橋に設置されたバンジージャンプの装置を身に着け、飛ぶ勇気を得るため、晴人の好きなアニメの主人公のコスプレをした真実。そこに浩二に連れられ晴人と妹のアキが駆け付ける。晴人に謝罪するため、バンジーを飛ばうとするがやはり怖くてなかなか飛べない真実。止めようとする晴人とアキを浩二が応援するよう促す。三人の応援の声を受け、果たして真実はジャンプできるのか。

【登場人物表】

波多野 真実（42）・回想（33）（3）：主婦。晴人とアキの母親。晴人に甘いところがある。高所恐怖症。

波多野 浩二（45）：会社員。晴人とアキの父親。家事と子育ては真実任せだが話は聞く。

波多野 晴人（16）・小学生（7）・幼少期（5）：波多野家長男。高校二年生。アニメオタク。フィギア集めが趣味。テスト勉強になると自分を責めて暴れる。

波多野 アキ（13）幼少期（2）：晴人の妹。中学二年生。テニス部。なんでも楽しむ天真爛漫な性格。

陸（16）：晴人のクラスメイト。高校で唯一の友達。

赤坂（35）：フィギア専門店の店長。

美紀（38）・回想（23）：真実のママ友。息子同士が中学時代の同級生。

弘樹（16）・乳児期（1）：晴人の中学時代の同級生。

美紀の夫（40）

弘樹の妹（12）

ほうじょう 北条 あきこ 晶子（40）：スクールカウンセラー。

他、はとバスのバスガイド

晴人の高校のクラスメイト数名

カフェ店員

バンジージャンプのスタッフ数名

○ 橋の上

「美少女魔導士エリリン」のコスプレをしてバンジージャンプの装置を身につけている波多野真実（42）。ジャンプしようとするが足が震え、動機がして飛べない。その姿を橋のたもとから固唾をのんで見守る晴人（19）、アキ（13）、浩二（45）。

タイトル「翔べ！ かあさん」

○ スカイツリー・外観

「GMフェア」ののぼりがあちこちに立っている。ソラカラちゃんと写真を撮っているアキ、晴人、浩二、真実。そのそばを歩きかう家族連れやカップル。

○ 同・展望台

エレベーターの扉が開き、アキ、晴人、浩二が降りてくる。

アキ「うわー、見て見て、あんな遠くまで見えるよー」

はしゃいで歩きまわるアキ。スマホで景色を撮っている。その後をついていく晴人と浩二。

晴人「母さんも来れば良かったのに」

浩二「だめだよ。あいつは。昔から高所恐怖症で、夜景だってどんなに誘っても行かなかったんだから」

○同・麓のカフェ

真実の目の前に大きなパフェが運ばれてくる。

真実「うわー」

手を叩いて喜ぶ真実。スマホで撮りまくる。

○はとバス（車内）

都内を走るはとバスの車内で揺られる波多野一家。

バスガイド「：先ほどご覧いただきましたス
カイツリーに続きまして、右手に見えて
きましたのは、高さ333メートル、皆
さまお馴染みの東京タワーでございます
す。目にも鮮やかなこのタワー、何色に
見えますでしょうか。一般的には朱色、
赤色だと思われていますが実はインタ
ーナショナルオレンジと申しますオレ
ンジ色なのでございます。」

アキ「インターナショナルオレンジだって」
浩二「へえ、初めて知ったよ」

真実「え？ 浩二さん知らなかったの？ ほ
んとに東京生まれ？」

浩二「うるさいよ」

晴人「：」

イヤホンを耳につけ、スマホを見ている
晴人。

真実「こら晴人、もっと景色とか楽しみなさ

いよ」

晴人「：」

聞いてない晴人。

○東京タワー・展望台

映えスポットで自撮りするアキ。

アキ「ねえ、撮って撮って」

晴人にスマホを渡し、ポーズをとるアキ。
めんどくさそうにシャッターを押す晴人。

アキ「もう、なんか合図出して撮ってよ。目
つむっちゃったじゃん」

晴人「はいはい、はい、ぼーず」

アキ「もう、何がはいぼーずよ。もういい」
晴人からスマホを取るアキ。また自撮り
する。その横でつまらなそうに景色を見
る晴人。

晴人「久々の家族旅行なのに、都内のはとバ
ス日帰り旅行なんて冴えねー」

浩二「仕方ないだろ。お父さんの仕事が休み
で晴人とアキの都合に合わせたら今日
しかなかったんだから。はとバスも他は

全部予約が埋まってたし」

アキ「私は全然楽しいよ。スカイツリーも東京タワーもこんな機会がなきゃ、わざわざ行こうなんて思わないし。お母さんが上まで来れないのはちよつと残念だけど」

はしやぎながら、自撮りしまくるアキ。

○東京タワー・二階・土産物売り場

ショッピングを楽しむ真実。試食を食べまくる。

○レストラン・外観（夜）

ファミレスの窓から、食事をしている客の姿が見える。

○レストラン（内・夜）

ディナーを楽しむ波多野一家。

真実「家族で外でご飯食べるのも久しぶりね」
浩二「そうだな。こいつら、友達と行くよう

になって家族であまり行かなくなった
からな」

晴人「だって、家族で行ったって、話すこと
ないし」

アキ「私は土日ほとんど部活だから、帰り
に友達と行っちゃうしね」

晴人「それにしても、前から不思議だったん
だけど、母さんはなんで、高いところ駄目
なの？」

真実「ん？　そうねえ。お母さんはあまり覚
えてないんだけど、おばあちゃんから聞
いた話だと小さいころにね、団地の五階
の窓から落ちたことがあるのよ」

×
×
×

○団地・五階・真実の生家（回想）

真実（３）、窓のそばに置かれた椅子の上
によじ登り、開いた窓から身を乗り出し、
バランスを崩す。窓から外へ落ちる真実。

生い茂る背の高い生け垣の中へ。近くを
歩く人々がざわめき、駆け寄る。

× × ×

○ レストラン（内・夜）

真実「幸い、落ちたところに生け垣があつて
助かったんだけど、多分そのときの恐怖
が心のどこかに残つてて、高いところに
昇つただけで動機とめまいがして駄目
なのよ」

晴人「へえ、そんなことあつたんだ」

浩二「小さい頃に体験したことは、たとえ本
人が覚えてなくても、心の片隅にずっと
張り付いて取れねえものなんだよ。特に
悲しかったり怖かったりしたことって
ものはな」

晴人「ふーん」

ハンバーグにかぶりつく晴人。

○波多野家・外観（日替わり・タ）

住宅街のこじんまりとした一軒家・3LDK。
庭にあじさいが咲いている。

○同・リビング（タ）

テレビ画面に「美少女魔導士エリリン」
のアニメが映っている。それをソファで
寝ころびながら観ている晴人。真実、キ
ッチンで夕飯の支度を始める。

真実「晴人、テスト勉強は？」

晴人「これ終わったらするよ」

テレビのほうを向いたまま返事する晴人。
テレビにはエリリンの変身シーンと
山々を縫って飛行するシーンが映って
いる。

× × ×

○同・キッチン（タ）

夕食の支度をする真実。二階からドスン、

ドスンと大きな音が聞こえてくる。上を見上げて怪訝な表情をする真実。手を洗って二階へ行く。

○同・二階・晴人の部屋（タ）

晴人の部屋のドアをノックする真実。返事はない。ドアを開ける真実。床にプリントが散乱している。壁には殴りつけた穴が開いている。

真実「晴人、大丈夫？」

勉強机で貧乏ゆすりをしながら勉強をする晴人。

晴人「もう！　なんでわからないんだ！」

頭を掻きむしり、数学の教科書を床に投げつける晴人。

晴人「母さん、これわかる？」

ドアの前で立っている真実のところへ演習のテキストを持って立ち上がり問題を見せに来る晴人。問題を見て暫く考える真実。エプロンのポケットからスマホ

を出して、問題を撮る。

真実「考えるから、先に他の問題やってなさ
い」

勉強机に戻る晴人。ドアを閉める真実。

○同・ダイニング（夜）

ダイニングテーブルでチラシの裏側にス
マホで撮った問題を書き写し、ネットで
調べる真実。なかなか問題が解けない。
夕食の支度ができないまま、刻々と時間
が過ぎる。インターホンが鳴る。モニタ
ーにアキの顔。

○同・玄関（夜）

玄関の鍵を開けに行く真実。テニスラケ
ットとスポーツバッグを背負ったジャ
ージ姿のアキ、玄関に入る。

アキ「ただいま」

真実「おかえり。ごめんね。夕飯の支度まだ
なの。もう少し待っててくれる？」

支度途中のキッチンを見、ダイニングテーブルのチラシを見るアキ。

アキ「お母さん、またお兄ちゃんの勉強手伝
ってんの？」

真実「これ、お兄ちゃん、わからないって言
うから」

アキ「そなの、自分で調べろって言えばい
いじゃん。甘やかしすぎだよ」

真実「そうは言ってもねえ。お兄ちゃん、テ
スト勉強、頑張ってるから」

アキ「はあ。なんでテスト勉強始めるとあん
なにイライラするんだろ。私だって勉強

わからないときあるけど、あそこまでイ
ライラしないよ。お兄ちゃん、どっかお

かしいんじゃない？」

真実「普段は優しい子だし、イライラするの
はテスト勉強してるときだけだし。ただ

焦ってるだけよ。高校は単位落としたら
進級できないから。この問題終わったら

夕飯すぐ作るから」

アキ「もういいよ。おなかぺこぺこ。適当に何かレンジで温めて食べるから。着替えてくる」

二階に行くアキ。

○同・二階廊下（夜）

晴人の部屋のドアをチラ見して自分の部屋に入るアキ。

○同・ダイニング（夜）

スマホをいじりながら必死で問題を解く真実。ふと思い立ってリビングの棚の箱からプリントを取り出す。そのプリントには晴人の通う蓮池^{はすいけ}高校の相談室の日程とスクールカウンセラーの名前（北条^{ほうじょう}昌子^{あきこ}）が書かれている。プリントを見つめる真実。

○蓮池高校・外観（翌日）

門扉の横に「蓮池高等学校」のプレート。
終業のチャイム。生徒たちが校舎から一
斉に出てくる。

○蓮池高校・二年一組

テストが終わって帰り支度を始める生徒
たち。晴人のところへ同級生の 陸^{りく}（16）
が近寄る。

陸 「テスト、やっと終わったな。今からカ
ラオケでも行く？」

晴人 「ごめん。俺、行くところあるから」

陸 「え？ もしかしてまたフィギア見に行
くの？ こないだ行ったばかりじゃん」

晴人 「予約してたのが今日入荷したって連絡
あったんだ。延期、延期でやっと入荷し
たから早く取りに行きたくて」

陸 「お前、ほんとにエリリン好きだよな。
じゃまたな」

晴人 「うるさいよ。じゃあな」

同級生男子 「おい、陸」

陸、呼ばれて他の友達のところへ行く。
リュックを担いで教室を出る晴人。

○フィギア専門店・外観

店頭に置かれたガチャガチャに群がる子供たち。その横を通って店内に入っている晴人。

○フィギア専門店（内）

陳列棚に所狭しと置かれたいろんな箱入りのフィギア。店内を見回しながらレジに行く晴人。レジには店長の赤坂（あさか）が立っている。

赤坂「おっ。来た来た。早速来たねえ。じゃーん、これだよ。随分、待たせちゃったね」

赤坂、美少女魔導士エリリンのフィギアが入ったケースをレジカウンターの上に置く。

晴人「おおっ！ 待ってました。それじゃ、

これで」

赤坂「毎度あり」

支払いをする晴人。ケースを持ち上げて
眺めまわす。

晴人「やっぱ、山洋堂のフィギアは最高っす
ね。このマントのうねり具合が絶妙っす」

赤坂「晴人君、さすが目の付け所が違うよね。
待たせたおわびにこのキャラくじ、一回、

サービスするよ」

晴人「本当っすか？ あざーす」

晴人、くじの箱に手を入れる。

○波多野家・晴人の部屋

真実が掃除機をかけている。勉強机には
床に散乱していたプリントが無造作に
積みまれている。ガガッと何かを吸い込ん
だ音がする。掃除機のスイッチを止めて、
ダストボックスの中をのぞく真実。ごみ
がいつぱい詰まっている。

真実「何か吸ったような。…うーん、まいつ

かー

そのまま、晴人の部屋のごみ箱にダストボックスのごみを捨ててしまう。

○アニメショップ

店内をうろつく晴人。エリリンのコーナーで商品を物色する。

○電車（内・タ）

窓から夕陽がさす車内。フィギアの入った手提げ袋を持った晴人、てすりにもたれて立っている。くじで当てたデフォルメされたエリリンのキーホルダーを嬉しそうに掲げながら見ている。

○波多野家・玄関（タ）

晴人、ご機嫌で玄関に入ってくる。

○同・リビング（タ）

リビングを通過して自分の部屋へ向かう晴

人。キッチンで夕食の支度をする真実、
晴人に気づく。

真実「おかえり。ちよつと、ただいまくらい
言いなさいよ」

晴人「ただいま」

そそくさと二階へ行く晴人。

○同・二階・晴人の部屋（タ）

手提げ袋からケースを取り出し、ケース
からフィギアを取り出す晴人。棚にある
違うバージョンのエリリンのフィギア
の隣に並べる。そこで何かに気づく。慌
てて部屋の中を捜し回る晴人。部屋中が
荒らされていく。

晴人「ない！　ない、ない、ない！」

自分の頭を何度も殴る晴人。

晴人「くそっ。なんでないんだ」

晴人、部屋を出て階段を駆け下りる。

○同・ダイニング（タ）

慌てた様子の晴人が入ってくる。

晴人「母さん、母さん、どこやった？」

真実「え？ 何？」

晴人「だから、エリリンの顔、顔がないんだよ」

真実「エリリンの顔？ 顔がどうかしたの？」

晴人「前に買ったエリリンのフィギア、表情が2パターンあって、顔のパーツが替えれるんだけど、その替えパーツがないんだよ。母さん、知らない？」

真実「どんなの？」

晴人「こういうのだよ」

晴人、スマホの画面を見せる。そこにはエリリンの替えパーツの画像。

真実「そんなの、知らないわよ。ちゃんと捜したの？ いつもろくに捜しもしないでないない言うでしょ」

晴人「ちゃんと捜してるよ。部屋中見たけどないんだ。くそっ、くそっ」
自分の頭をまた何度も殴る晴人。

真実「もう、ちょっと、やめなさい。お母さんも捜すから」

晴人と二階へ行く真実。

○同・二階・晴人の部屋（夕）

散らかった床を見回す晴人と真実。

真実「最後に見たのはどこ？」

晴人「この棚の上にフィギアと一緒に置いてたのがいつの間になくなってたんだ」

真実「棚から落ちたんなら、棚の下とか」

顔を床に押し付けて棚の下を覗き込む真実。

晴人「何度も捜したよ。でもないんだよ。母

さん、今日、部屋の掃除した？」

真実「昼間、掃除機かけたけど。…あ、そういえば何か硬いもの吸ったような音がしたっけ」

晴人「ええ？　それからどうしたの？」

真実「そのままそこのごみ箱に捨てちゃったけど」

晴人「もう！　なんでだよ」

晴人、ごみ箱の中身を床にぶちまける。
ごみをかきわけ、パーツを捜す。埃にま
みれたパーツがみつかる。

晴人「あった！」

晴人、パーツに息を吹きかけ、埃を飛ば
し、服で磨く。真実、うんざりした顔で
それを見ている。

○シヨッピングモール（日替わり）

買い物袋を下げウインドウショッピング
をしている真実。カフェの前でママ友の
美紀（w）と出会う。

美紀「あら、真実さん、久しぶり」

真実「え？　美紀さん？　ほんと、いつ振り
かしら」

美紀「弘樹^{ひろき}達の中学の卒業式以来じゃな
い？」

真実「高校、別々になっちゃったから会う機
会もなかなかよね」

美紀「時間、大丈夫？　　そこでお茶しよ」

真実「ええ、大丈夫よ」

近くのカフェに入る二人。

○カフェ（内）

レジ横にケーキが並ぶショーケース。

真実と美紀、ケーキセットを注文して、奥のテーブルに行く。

店員がケーキセットを運ぶ。

店員「お待たせしました」

ケーキをつつく二人。

美紀「晴人君、元気？　　うちの子は相変わらずサッカー部で二年になっても補欠どまりよ。まあ、それでも本人は好きでやってるから楽しそうだけどね」

真実「弘樹君、サッカー頑張ってるんだ。うちの子は帰宅部よ。アニメオタクで、フイギアばっか眺めてる。親としてはなんでもいいから部活入って頑張ってほしかったんだけどね」

美紀「中学のときは漫研だったよね。高校では入らなかったの？」

真実「一度、部活見学に行ったんだけど、先輩とそりが合わなかったみたい。うちの子、マニアックだから」

美紀「そういえば、全然知らないアニメの話よくしてたわね。弘樹は面白がって聞いてたみたいけど」

真実「漫研じゃ同学年の子がいなくて晴人の相手してくれてたの、クラスで弘樹君だけだったみたい。高校でも弘樹君みたいに面白がって聞いてくれる子が一人いるみたいけど、たいていの子とは話が合わなくて友達の名前はその陸って子しか聞いたことない」

美紀「一人でもいてくれて良かったじゃない」
真実「ほんとに。それにね、高校入ってから、テスト勉強になると、暴れるようになった」
て」

美紀「暴れる？」

真実「問題がわからなくなると、イライラしだして、教科書投げつけたり、自分の頭を殴ったり。一年のときに、壁に穴あけちゃったわよ」

美紀「壁に穴って。大丈夫なの？」

真実「家族に暴力振るうことはないんだけど、テスト勉強の度に、頭搔きむしって叫んで、見てるこっちが辛いわよ」

美紀「ええ？ あの時人君が？ 全然想像できないんだけど。：実を言うとね、うちの弘樹、ああ見えて、時々チックの症状が出るの。弘樹の場合は顔の左側が引きつってウインクしてるみたいに左目だけ瞬きが増えるの」

真実「チック？ 中学の時は気づかなかったけど」

美紀「弘樹も高校入ってからなのよ。病院で診てもらったら、脳波とか身体は特に異常はないって。それで一概には言えないけれど心因性の場合なんらかのスト

レスを感じたときに症状が出るんだって。それでどんなときにチックが出るか観察してただけど」

真実 「うん」

美紀 「あの子がテスト前なのに勉強しないでゲームばかりやってるときにきつく叱るときがあるんだけど、そういう時に決まってチックの症状が出るのよ」

真実 「叱られることがストレスになってるってこと？」

美紀 「普通はそれくらいじゃチックにはならないらしいんだけど、私、思い出したことがあって」

真実 「何？」

美紀 「あの子がまだ赤ちゃんだった時、夜泣きがひどくてね。うち、マンションでしょ。お隣に迷惑じゃないかって気が気じゃなくて。初めての子で精神的に余裕もなく、何度も『どうして泣くの！』って怒鳴った願いだから泣かないで！』って怒鳴った

りして。ある時つい、あの子の口を手で塞いじやったことがあるの。すぐに正氣に戻って大事には至らなかったんだけど、自分で自分が恐ろしくなって、しばらく自己嫌悪で落ち込んだわ」

× × ×

○マンションの一室・寢室（夜・回想）

夜泣きする弘樹（1）。そばに座る美紀（23）。

美紀「もう、なんで泣くの？　お願いだから

泣き止んでよ」

弘樹を抱いて、部屋を行ったり来たりする美紀。

美紀「ああ、またお隣から苦情がきちゃうじゃない。どうしたら泣き止んでくれるの！」

あやしても泣き止まない弘樹。弘樹の口を手で塞ぐ美紀。我に返り、慌てて口か

ら手を離す。

美紀「ごめんね。弘樹。ごめんね」

泣きながら何度も謝る美紀。

× × ×

○カフェ

真実「それが原因だって言うの？」

美紀「赤ちゃんのときのことだから記憶には

無くて、潜在意識の中にその時の怖か

った感情は残ってるんじゃないかって」

真実「……」

暫く考え込む真実。自分の子供の頃の話
を思い出す。(回想)

○波多野家・ダイニング(夜)

ダイニングテーブルで晩酌をしている浩
二と真実。瓶ビールとグラス二つ、おっ
まみが置かれたテーブル。二人ともパジ
ヤマ姿。のびをする真実。

真実「はあ、やっと晴人のテスト終わった」

浩二「お疲れ」

真実のグラスにビールを注ぐ浩二。

真実「晴人、テストの度に、わからんって暴れて、代わりに問題解くのも一苦労よ。そのせいで晩御飯の支度は進まないし。テスト終わったと思ったら、フィギアのパーツがないって大騒ぎするし。そのたびにあの子、自分の頭殴るのよ。ほんとにどうにかなっちゃうんじゃないかって気が気じゃないわよ」

浩二「人に暴力振るうよりはまだましだろ。俺も晴人の年頃には反抗期で訳もなくイラついてたし、高校卒業する頃にはおさまってるよ」

真実「なんでも思春期のせいにしていいのかな。今日ね、弘樹君のママに偶然会ったんだけど」

浩二「ああ、晴人が中学の時の同級生の」

真実「そう。それが、弘樹君も高校入ってから叱られるとチックの症状が出るよう

になったんだって。それで病院で診てもらったなら、心因性じゃないかって」

浩二「心因性？」

真実「美紀さん、弘樹君が赤ちゃんの時に夜泣きがひどくて、怒鳴りつけたことがあったらしくて、それが原因じゃないかって」

浩二「お前の高所恐怖症みたいなことか」

真実「うん。私もそれを思い出して。一度、晴人の高校の相談室でスクールカウンセラーの先生に相談してみようかと思ってる」

浩二「そんな、深刻にならなくてもいいと思うけどな。それでお前の気が済むなら行ってみたらいいよ」

うなずく真実。

○蓮池高校・外観（日替わり）

校舎に入っていく真実。

○同・相談室（内）

ロ―テーブルを挟んで向かい合わせにソファが置かれている。その一方に座る真実。電気ケトルでお茶を入れている北条昌子（ㇿㇿ）。テーブルにお茶を置いてソファに座る。

北条「初めまして。スクールカウンセラーの北条と申します。波多野晴人さんのお母様ですね。今日はどんなご相談ですか？」

真実「はい。晴人のことなんですけど、普段はとても優しくてうちの手伝いもよくやってくれるとてもいい子なんです。ただ……」

北条「ただ、なんですか？」

真実「テスト勉強を始めると、途端に人が変わったようになって。問題がわからないと、自分を責めるように暴れるんです」

北条「暴れるとは具体的にどんな風に？」

真実「教科書を床に叩きつけたり、机や壁を殴ったり、自分の頭を自分の拳で殴るこ

ともあります。でもそれは、自分に対してだけで、決して家族に暴力を振るうこととはないんです」

× × ×

○ 晴人の部屋（回想）

床に教科書を叩きつけたり、壁を殴って穴をあけたり、自分の頭を自分で殴る晴人。

× × ×

○ 蓮池高校・相談室（内）

北条「暴れるのはテスト勉強のときだけですか？ 普段の生活で怒ったときはどうでしょうか？」

真実「普段、怒ることは滅多にないんです。怒るときはいつも自分を責めるときで。物を無くしたり、失敗したときに、執拗

に自分を責めるんです。どうしてこうな
ってしまったんでしょうか？　痛々し
くてとても見ていただけません」

北条「そうですか。そうなってしまうのに、
何か心当たりはございませんか？」

真実「心当たりですか？　それは、という
意味で」

北条「晴人さんのようなお子さんの問題の原
因はたいてい、幼少期に何かしら心の
傷を負っている場合が多いんです。もち
ろん、先天的な気質であったり、脳の機
能の障害が原因であることもあります。
晴人さんの場合、日常生活には何も支障
がなくて、特定の場面のみ、問題行動が
表れています。晴人さんがご自分を責め
るのは幼少期に何か責められるような
出来事があったのではと考えられるの
ですが……」

真実「晴人を責めるような出来事ですか？」
暫く考え込む真実。シヨッピングモール

での美紀の言葉を思い出す。(回想)それから晴人の幼少期の出来事を思い出す。

○波多野家・二階・晴人の部屋(回想・九年
前)

勉強机でテスト勉強をする晴人(〽)。その横でそれを見ている真実。

真実「また、違う。それはそうではないですよ。何度言ったらわかるの？」

消しゴムで答えを消す晴人。また間違った答えを書く。

真実「もう！ そうじゃないって言ってるでしょ。何度同じこと言わせるの？ ここはこうするんだって」

問題の解き方を書き込む真実。声が次第に荒くなる。

真実「あんたは余計な事を考えすぎるの。もっと単純にここをこうすれば、ほら解けるでしょ」
うなだれている晴人。

真実「はあ、お母さん疲れちゃった。ちよつと休憩」

部屋を出る真実。涙をこらえる晴人。ドアの前で声を荒げたことを後悔するよ
うに俯く真実。日替わりで何度も怒鳴り
つける回想。

○同・リビング（現在・夜）

パジャマ姿でホームビデオを観ている真
実。テレビには、幼少期の兄妹の姿。キ
ャンプでBBQをしている波多野一家。
皆楽しそうに笑っている。

風呂上がりの方の浩二、冷蔵庫から缶ビール
を取り出し開けて飲みながら真実の隣
に座る。

浩二「どうしたんだ。夜中にそんなの観て」
真実「私、ずっと子供たちのこと、精一杯
愛してきたつもりだった。子供たちのこ
とを一番に考えてやってきたつもりだ
った。でも、間違ってたみたい」

顔を両手で覆う真実。

浩二「何があったんだ、言ってみろ」

真実「今日、晴人の高校の相談室へ行ったの」

浩二「ああ、こないだ言ってたやつか」

真実「それでスクールカウンセラーの先生から子供の問題の原因は、たいてい幼少期の心の傷だつて言われて、心当たりはな
いかつて」

浩二「なんだ、心当たりがあるのか？」

真実「思い出したのよ。あの子がまだ小学校低学年の時。定期テストの勉強を見てあげてた時に、私、あの子のこと怒鳴り散らしてた。同じ問題で何度もつまずいて、ついカッとなつて。あの子は一生懸命、問題を解こうとしてたのに、私は、なんでもわからないんだって。ああ、私、なんてことしたんだろう。なんで今まで忘れてたんだろう。どうすればあの子の心の傷を癒してやれるんだろう」
泣き出す真実。その肩をさする浩二。

○同・リビング（夜・日替わり）

リビングでゲームをする晴人。キッチンでお皿を拭きながらそれを見ている真実。

真実「晴人、あのね……」

晴人、ゲームに夢中で聞いてない。声をかけるのをやめて食器を拭いて棚に置く真実。

○同・二階（日替わり）

晴人のドアの前。ノックをしようとする真実。そこへ、アキが階段を昇ってくる。ノックをやめる真実。

アキ「あれ？ お母さんどうしたの？」

真実「ううん。なんでもない」

階段を下りる真実。

○同・トイレ（日替わり）

トイレ内にスマホを持ち込んで便器に

座っている晴人。そのドアの前でノックする真実。

真実「ねえ、晴人、あのね……」

晴人「もう！　人がうんこしてるときに話しかけるなよ」

真実「……ごめん」

その場を離れる真実。

○同・玄関（日替わり・朝）

玄関のごみを持って出ようとする晴人。

晴人「母さん、これ出しとくね。いってきます」

真実「うん、ありがと。晴人、あのね……」

晴人「なに？」

真実「……やっぱりなんでもない。いってらっしゃい」

玄関を出る晴人。それを見つめる真実。

○同・ダイニング（日替わり・夜）

パジャマ姿で晩酌をする真実と浩二。真

実のグラスにビールを注ぐ浩二。

浩二「お前、あれから元気ないな。大丈夫か？」

真実「それが、晴人に何度も謝ろうとするん

だけども、どうしてもできなくて。今更、

何年も前のこと、許してなんて言えない」

浩二「晴人なら許してくれると思うけどな。

そうだな。今度、久しぶりにキャンプでも行くか」

真実「子供たちもう大きいし。一緒に行ってくれるかしら」

浩二「俺がうまいこと言って連れてくよ。場所が変われば気分も変わって、お前も言い出せるだろう」

真実「そうね。でも普通に謝っても駄目よね」

リビングの点けっぱなしになっているテレビ画面へ芸人がバンジージャンプをしているのを見て何か思いつく真実。

真実「ねえ、浩二さん、お願いがあるんだけど……」

浩二「なんだ？」

何やら話し込む二人。

○ キャンプ場・入口（日替わり）

○○ キャンプ場の看板。蟬の鳴き声。木の幹から飛び立つ蟬。

○ 同・テント広場

川べりのキャンプ場でＢＢＱをする波多野一家と弘樹の家族（弘樹の父（４０）、美紀、弘樹（１９）、弘樹の妹（１２））。

○ 同・川辺

釣りをする浩二。少し離れた場所で水切りをする晴人と弘樹。

弘樹「スマホで連絡は取ってたけど、ちゃんと会って話すの久しぶりだな」

晴人「そうだな。弘樹、二年になっても補欠なんだってな。母さんから聞いた」

弘樹「補欠だからなんだよ。好きでやってんだからいいだろ。晴人こそ、今は何のア

ニメにはまってるんだよ」

晴人「『美少女魔導士エリリン』だよ」

弘樹「知らねー。やっぱお前ってマニアックだよな。どうせ部屋中エリリンだらけなんだろ」

晴人「ああそうだよ。うるさいよ。万年補欠が」

弘樹「言ったな。この二次元美少女オタクが。そんなんじゃないぞ」

晴人「俺はいいんだよ。エリリンが俺の嫁だから」

弘樹「でたー。謎の嫁呼ばわりやめろよな」
晴人「もういいだろ。俺の好きにさせろ。このっ」

川の水を引っかけあう二人。
その近くで冷やしたスイカを運ぶアキ
と弘樹の妹。

スイカ割りが始まる。

目隠しした晴人、長い枝を上に掲げて歩く。その周りで「右、右、左、左」と声をかける面々。晴人、枝で叩いてスイカを割る。歓声があがる。

割れたスイカを切って紙皿に盛り付ける真実と美紀。スイカを取って食べるアキ。

アキ「皆でキャンプするの久しぶりだね。お母さん、虫が嫌いでもうキャンプは嫌だって言ってたのに」

真実「あんなたち大きくなってなかなか家族旅行も行けないじゃない。たまにはキャンプもいいかなって」

アキ「私は楽しいからいいけど」
真実「アキはなんでも楽しんでくれるからいいわ」

アキの肩に手をまわしてじゃれる真実。
アキ「もう、お母さん、くすぐりたい」
離れようとするアキにますますくつつく

真実。

○キャンプ場・簡易トイレ

トイレから出てくる真実。その前で待っていた浩二。

浩二「真実、明日ほんとに大丈夫か？無理

なら無理って言っているんだぞ。普通に謝ったって晴人なら許してくれるさ」

真実「大丈夫よ。もう覚悟はできてる。浩二さん、明日頼むね」

浩二「：あ、ああ、わかった」

○キャンプ場のそばの橋の上（夕）

夕日を眺める波多野一家と弘樹の家族。スマホやデジカメで写真を撮る面々。

○キャンプ場（夜）

手持ち花火を楽しむ面々。噴出花火や打上花火で盛り上がる。

× × ×

○ キャンプ場（夜）

人氣がなくなり、テントに明かりが点く。

○ 同・テント（内・夜）

寝袋姿の浩二とアキが寝ている。なかなか寝付けない真実、晴人がいないのに気付く。

○ 同（夜）

焚き火の前で一人、焚き火を見ている晴人。そこへ来て隣に座る真実。

真実「眠れない？」

晴人「うん。俺、枕変わると寝れないから」

真実「お母さんも。お湯沸かしてココアでも

飲もうか」

晴人「うん」

ココアの用意をする真実。晴人に渡す。

晴人「ありがとう」

真実「…あのね、お母さん、あんたに謝らな

ければならないことがあるの」

晴人「何？　何か壊したとか？　俺のフィギア」

真実「ううん、そうじゃない。明日、ちゃん

と話して謝るから」

晴人「なんで明日？　今じゃだめなの？」

真実「これは、お母さんなりのけじめなの。

普通に謝るだけじゃ駄目だって」

晴人「そんな大変なことしたの？　なんか怖

いなあ」

真実「明日、お母さんが謝るところ、ちゃん

と見ててね」

晴人「う、うん。なんだかよくわからないけ

ど、分かった」

静かに燃えている焚き火。それを見つめ

る晴人と真実。

○キャンプ場（翌日・朝）

帰り支度をしている面々。晴人が辺りを

見回す。

晴人「ねえ、父さん、母さんどこ行ったの？

起きた時からいないんだけど。トイレか
と思ったけど、全然帰ってこないし」

浩二「ああ、お母さん、ちょっと用事があつ
て。あるところにいるよ」

晴人「あるところ？」

弘樹の家族が帰り支度を終えて、挨拶に
来る。

弘樹の父「それじゃ、私達は帰りますんで」

浩二「お疲れさまでした。また今度」

弘樹の父「はい、ではまた」

美紀「あれ？ 真実さんは？」

弘樹の父の隣で辺りを見回す美紀。

浩二「あのちよつと、野暮用で」

美紀「それじゃあ、真実さんによろしく」

浩二「はい、伝えときます」

晴人「じゃあな。バイバイ」

弘樹「バイバイ」

アキ「バイバイ」

弘樹の家族、手を振って車に乗り込み去
る。

浩二「そしたら、俺達もお母さんところ行くか」

浩二を先頭に歩き始める三人。

○キャンプ場近くの橋

橋の上にはバンジージャンプの設備が組まれていて、エリリンのコスプレをした真実がスタンバっている。

周りでバンジーのスタッフが最終点検をしている。橋のたもとに浩二に連れられ、晴人とアキが来るのが見える。

○キャンプ場近くの橋のたもと

浩二が橋を見上げて叫ぶ。その横に来て、橋を見上げる晴人とアキ。

浩二「真実ー、連れてきたぞー！」

晴人「え？ あれ母さん？ 何やってんの？」

アキ「なんでバンジー？」

晴人「なんでエリリン？」

○キャンプ場近くの橋の上

目をつむっている真実、深呼吸をする。
そのまま叫ぶ。

真実「晴人！ お母さん、あんたがまだ小学
生の時、勉強できなくていっぱい怒った
よね。その時の心の傷を今も引きずって
しまってるの、本当に悪いことしたって
思ってる。だから、お母さん、高いところ
苦手だけど頑張って飛ぶから！」

○キャンプ場近くの橋のたもと
目をぱちくりして真実を見る晴人。

晴人「え？ どういうこと？ 意味わかんない
んだけど」

浩二、晴人の肩を抱き、たたく。

浩二「お母さん、お前が小さいときにきつく
叱ったこと、思い出して後悔してるんだ
よ。お前がテスト勉強のたびに自分を責
めるだろ。それはお母さんのせいだって」
晴人「そんな」

真実を見守る三人。

○キャンプ場近くの橋の上

冒頭のシーン。ごくりと唾を飲み込む真実。飛ぼうとするが、足が震える。動機が激しくなる。時間が刻々と過ぎていく。

× × ×

○キャンプ場近くの橋のたもと

しびれをきらすように、叫ぶ晴人。

晴人「母さん、もういいよ。十分だよ。母さ

んの気持ちわかったから、無理しないで、

やめなよ！」

アキ「そうだよ。お母さんに何かあったら、

その方がお兄ちゃん、辛いよ！」

浩二「お前たち、お母さんはお母さんなりの

覚悟を持ってあそこにいるんだ。応援し

なきゃだめだろ」

暫く考えて、うなづく晴人とアキ。

晴人「そっか。そうだよな。母さん、頑張れ！」

アキ「お母さん、あとちよつと、あとちよつ
との勇氣だよ！」
口々に頑張れと叫ぶ三人。

○キャンプ場近くの橋の上

真実、三人の応援で震えが止まる。意を
決して飛ぶ。

真実「ごめんね晴人ー！！」

宙を舞う真実。必死の形相。

○キャンプ場近くの橋のたもと

真実を見ている晴人、エリリンの飛行シ
ーンがオーバーラップする。(エリリン
のアニメ映像)

晴人「エリリン」

つぶやく晴人。

× × ×

○キャンプ場近くの橋のたもと

ボートに下ろされた真実が岸について、
ボートから降りる。バンジーを終えた真
実のもとへ駆け付ける晴人とアキと浩
二。

晴人「お母さん、大丈夫？」

真実、息切れしながらうんうんとうなず
く。

真実「大丈夫。怖かったけど、ちよつと気持
ちよかった」

晴人「もう、心臓飛び出るかと思ったよ。よ
かった、無事で」

アキ「ほんとだよ。いい歳して無茶するんだ
から」

涙目で真実に抱き着くアキ。

真実「心配かけてごめんね」

アキの頭をなでる真実。晴人と浩二も抱
き着く。泣き声をあげる波多野一家。

○自家用車（内）

帰りの車内。運転する浩二。助手席に真

実。後部座席に晴人とアキ。アキは眠っている。

晴人「母さん、何年も前のこと、なんで謝ろうと思ったの？」

真実「ずっと気になってたのよ。あんたがテスト勉強になると自分を責めて、自分を殴るのが。最初はね、気質だと思ってた。

晴人は生まれつきそういう気質なんだって。だからいつも、自分を責めるのやめなさいって言ってたでしょ、お母さん。

でも、毎回、テスト勉強の度に自分を責めるあんたを見てて、もしかして、何か他に原因があるんじゃないかって。スクールカウンセラーに相談したのよ。それで、思い出した。小さいとき、あんたのこと怒鳴ってたこと。あんたたち、大きくなって、いい子に育って、あまり怒ることもなくなくなったじゃない。だから、すっかり忘れてた。でも、あんたはずっと忘れてなかったのよね。ずっと心は傷つ

いたままだったのよね。それを知って、
謝らなきゃって思ったの」

晴人「俺も言われるまで忘れてたよ。自分でも、どうしてあんなにイライラするのかわからなかった。怒りを抑えようとしてもコントロールできなかった。そんな自分にもまた苛立って、悪循環。無意識の中でお母さんに怒られるのが怖かったのかな。それにしても、びっくりしたよ。

高所恐怖症のお母さんがバンジーなんて。東京タワーも、スカイツリーも、お母さん、一度も昇ったことないじゃん。これじゃ許さないわけにいかないよ」

真実「自分でもびっくりよ。でも、あんたが何年も心を痛めてたことに比べたら、あんなの一瞬なもの。あんたがまだ許してくれなかったら何度も飛ぶつもりだったんだから」

晴人「ほんとに？　もう勘弁だよ。こっちの気が持たないよ。それにあのコスプレな

んだよ。いくら俺がエリリン好きだから
って、あれはないよ」

真実「だって、素のままじゃ飛べそうになか
ったんだもん。せめてエリリンのコスプ
レしてたら飛べる気がするかなって」

浩二「いい歳したおばさんがエリリンのコス
プレして、あんな必死な形相、一回で懲
り懲りだよな」

笑う浩二と晴人。

真実「もう、ひどいんだから」

真実も笑う。目を覚ますアキ。

アキ「どうしたの？　なんで皆笑ってるの？」

浩二「バンジーのときのお母さんのコスプレ
と顔、ひどかったなって」

アキ「あは、確かに」

真実「もうやめてー」

笑い声で満たされる車内。

○波多野家・キッチン（夕・日替わり）

夕食の支度をする真実。その横で手伝う

アキ。ダイニングテーブルで新聞を読む
浩二。

○同・二階・晴人の部屋（夕）

テスト勉強をする晴人。問題がわからな
くてイライラし始める。

晴人「もう、わかんねえよ！」

立ち上がって壁を殴ろうとして止まる。

真実のバンジーする姿がフラッシュバッ
ク。

拳をおさめて、勉強机に戻る晴人。スマ
ホで解き方を調べる。

階下から真実の声。

真実「晴人ー、ご飯できたわよー」

晴人、部屋を出る。机にキャンプ場の家
族写真が飾られている。

○スカイツリー・展望台（日替わり）

エレベーターの扉が開き、真実、アキ、
晴人、浩二が降りてくる。

アキ「よかった。お母さんも一緒に来れて」
晴人「母さん、大丈夫なの？」

真実「う、うん。多分大丈夫」

辺りをきよろきよろしながら挙動不審になる真実。

浩二「おいおい、バンジー一回飛んだくらいで、高所恐怖症が治るもんか。無理するな」

アキ「上に昇ってきただけでも大進歩だよ。

今までどんなに行こうって言っても拒否ってたんだから。ねえ、お母さん、あそこで写真撮ろう」

真実の腕に自分の腕をまわして、ガラス張りの床に連れていくアキ。

真実「なによここ、下が丸見えじゃないの。ちよっと待って」

腰が引けてその場を離れようとする真実。
アキ「大丈夫だから。私がついてるから。お

兄ちゃん、写真撮って」

晴人にスマホを渡すアキ。

晴人「またかよ。ほら、はい、ぼーず」

アキ「またぼーずって言うてる。ちゃんと撮
ってよ」

真実「もう、無理無理。限界。お願いだから

勘弁して」

逃げる真実。

アキ「ちよっと、お母さん、待ってよ」

晴人からスマホを取って追いかけるアキ。

晴人「やれやれ」

二人を見て笑う晴人と浩二。

E
N
D